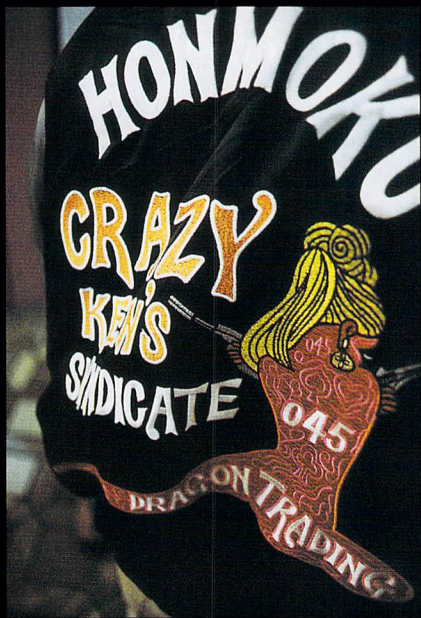


Watching Carefully

取材・文/トライアウト 撮影/斉藤 弦

第4回・新京極映画祭 @京極 弥生座
**横山剣と彼の
見ええないオーケストラ達**



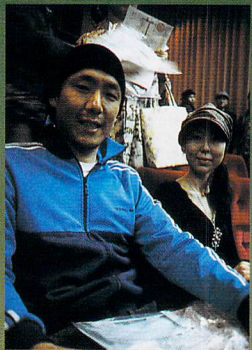


映画祭実行委員長の井上さん。今回のクロストークは、60年代後半に一世を風靡した伝説の洋楽音楽番組「ヒートポップス（＝大橋巨泉司会のアレです）」をイメージしたとか。「やっぱり面白いわ、剣さん」というご自身も大ファン

会場の3階までの螺旋階段が人、人、人で埋まった開場前。「やっぱり剣さん、凄い」と語るナミ（左）&ヤスコは最後尾から、必ず座れるので焦らずとも大丈夫です



着席後のミカ&トモキキをキャッチ。「舞台上にキーボードがあるってことは、歌うんちゃう？ いや〜ん!!!」と興奮気味の様子。結局、剣さんは入退場時に熱唱。♪オレの話を聞けえ〜!!って感じ



今回のイベント中に剣さんに直接「聞いてほしいCD」を手かか渡すのがキヨミさん。持ってきたのは「ハレンチアモー by 上田吉二郎&レ智 豊子」。ああ、やっぱり狂剣ファンですわね〜



ギャラの高低ではなく「おもしろいか、否か」で出演を判断したという、東洋一のサウンドクリエイター「クレイジーケンバンド」の剣さん。出演理由はかつての記憶。「修学旅行で来た時、新京極で木刀を買ったことがあって…。で、久々に今回新京極に来たら、相も変わらず木刀を売っている。イェ！新京極。PVに使いたい（笑）」

クレイジーケンバンドオフィシャルGジャンに身を包むヒロシさん（左）&コウイチさんは早朝、何と本牧からのご出馬。「男が男に惚れるってこういうこと」



開場前でも知り合えるのがファンの強み。アヤコさん（後左）、ヒトミさん（後右）、ヨシミさん（左）、ユミさん（右）はちよように知り合ったばかりで、この仲の良さ。「剣さんの色気が大好き〜!」

銀幕の街「新京極」meets 生粋のエンタメ男「オモシロイ」ってのはこういうことでした

今こそシネコン全盛の感があるが、かつての新京極には映画館が林立し、「銀幕」という言葉が実に似合う街であった。今でもある種のロマンが根強く存在するのでも事実だ。明治の時代から昭和中期までは寄席や劇場が建ち並んでいた。義太夫や浪花節専門の小屋があり、老若男女が晴れ着を装い、街を練り歩くといった風俗も見られ、銀幕の周りには、観て、笑って、食べて、飲んでの享楽があったのだ。それはブロードウェイでも、新京極でも何ら変わらない。

「修学旅行生も訪れる、今が嫌いではないけれど」とは新京極商店街に京都コスメの老舗店「左り馬」を構える実行委員長・井上恭宏さん。「本当の姿も知ってもらいたくて」と3年前から映画祭を始めた。生粋の京男ゆえ、懐かしいのがよいとか、古いのがよいとか、そういうレベルでの話ではない。素面の新京極が「いかに『娯楽の街であるか』を知らしめるためである。

例えば4回目となる今回、クレイジーケンバンドの横山剣さんをゲストに迎えたのも、剣さん一流のエンターテインメント性に期待してのこと。言ってしまうと「いち地方都市の映画祭に、呼びも呼んたり、来も来たり。だからチケット即ソールドアウトで集まった1800人は、決して彼の歌や演奏だけを聴きにきたわけではない。「何かおもしろいことをするらしいわ」という期待感。そして予想通りの抱腹絶倒の大爆笑。メインディッシュにロック漫画家兼レコード収集家、そして剣さんとも交流の深い安田謙一さんとのクロストークを用意したのも、純粋な「娯楽」で勝負したかったから。その思惑に狂いがあるうちはもなく、「こんなところですね、ホンマの新京極は」とイベント後、満足げな表情を見せる井上さんの言葉。あの瞬間、ここが弥生座は確かに「娯楽」の殿堂だった。なぜか土産物店に売っている木刀やスタンプロマイドさえもホメちぎる剣さんの感覚は、現代バラエティ飽食の時代にこそ貴重だ。